九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国における木材需給の動向 : アジア経済危機前まで

崔, 洙林
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻森林機能制御学講座森林政策学研究

岡森, 昭則
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻森林機能制御学講座森林政策学研究

堺, 正紘
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻森林機能制御学講座森林政策学研究

https://doi.org/10.15017/21089

出版情報：九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 55 (2), pp.297-306, 2001-02. 九州大学大学院農学研究院
バージョン：
権利関係：

九大農学芸誌（Sci. Bull. Fac. Agr., Kyushu Univ.）
第55巻　第2号　297-306（2001）

韓国における木材需給の動向
――アジア経済危機前まで――

崔　洙林*・岡森昭則・堺　正紘**
九州大学大学院農学研究院森林資源科学部門森林機能制御学講座森林政策学研究室
（2000年10月31日受付，2000年11月10日受理）

Trends of Timber Demand Supply in Korea until the Asian Economic Crisis

Soo Im CHOI*, Akinori OKAMORI and Masahiro SAKAI**
Laboratory of Forest Policy, Division of Forest Environment and Management Sciences,
Department of Forest and Forest Products Sciences, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581

I　はじめに

韓国の木材需給は過去30年間に大きな変化を遂げた．韓国は木材輸入国であり木材自給率は素材レベルで常に20％以下であった．熱帯広葉樹原木を大量に輸入し，合板を輸出していたのである．しかし80年代にはいると，木材資源保有国が自国内に林産業を発展させるとともに環境保護のために伐採量の削減と丸太輸入禁止規制を始めたことから，大きく変化することになる．熱帯広葉樹丸太の輸入が激減し合板輸入が飛躍的に拡大するとともに，ニュージーランド産針葉樹材輸入が増加するなど，木材の輸入構造の著しい変化が見られたのである．

本報告では，このような1970年代以降1990年代半ばの経済危機までの韓国の木材需給動向を統計資料によって素描することを目的とする．そのために，まず素材需給を概観し，ついで木材産業別に産業構造及び家具産業をとりあげる．

ところで，韓国経済は1997年に発生した経済危機によって著しく後退し，木材産業も大きな影響を受けた．木材産業は新たな構造変化を迫られることになったわけであるが，この97年の経済危機以降の変化については統計資料の制約で詳しく取り上げることができなかった．アジア経済危機以降の木材産業の動向分析は，現地調査による実態分析の深化を含めて他日を期すことにしたい．

II　1975年以降の木材需給の概観

1　木材需給量の推移

韓国の木材の需給量は，1975年の727万 m^3 が1980年には1,373万 m^3（増加率89％），さらに1990年に2,175万 m^3（80年対比58％増），1995年は2,533万 m^3（同84％増）への大幅な増加を続け，96年には2,740万 m^3（同100％）と史上最大を記録した．しかしその後は，1997年後半に発生した経済危機の影響で，97年2,645万 m^3（前年比△3％減），98年2,008万 m^3（前年比△24％減）と減少傾向が続いたのである（表1）．

2　木材供給の動向

木材供給を国内材と輸入材に分けてみると，国内材は概ね110万 m^3 前後にすぎず，輸入材のウェートが圧倒的に大きい．

* 九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻森林機能制御学講座森林政策学研究室
* Laboratory of Forest Policy, Division of Forest Environment and Management Sciences, Department of Forest and Forest Products Sciences, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University
** E-mail: sakaifor@agr.kyushu-u.ac.jp

表1　木材需給量の推移

単位：千 m^3

年	総数	国内材	輸入材			自給率（%）
			計	原木	製品	
1975	7272	896	6376	5119	1257	12(14)
1980	13731	1008	12723	6141	6582	7(13)
1985	12085	1188	20608	5578	5319	10(16)
1990	21746	1138	20608	8285	12323	5(12)
1995	25325	1055	24270	8229	16041	4(11)
1996	27404	1195	26209	8030	18179	4(13)
1997	26452	1062	25390	8266	17124	4(11)
1998	20081	1428	18653	4370	14283	7(25)

資料：山林庁『林業経済動向』1996，99年より作成．
注：自給率（　）は原木の自給率．

表2　用途別の原木需給推移

単位：千 m^3

年	総数	需要量								供給量					
		計	内需用				輸出用			計	原木供給量				廃材利用量
											内材			輸入	
			坑木	パルプ	合板	一般	計	合板	製材・その他		坑木	パルプ	一般		
1975	6465	2889	542	188	－	2159	3576	3226	350	896	542	188	166	5119	450
1980	7750	5785	515	546	1603	3121	1965	1753	212	1008	515	393	100	6141	601
1985	7321	6792	719	583	1836	3654	529	368	161	1188	719	293	176	5578	555
1990	9423	9121	512	479	1849	6281	302	40	262	1138	512	410	216	8285	640
1995	9284	8939	139	1275	1300	6225	345	186	159	1055	139	405	511	8229	1526
1996	9225	8893	109	1287	1334	6163	332	159	173	1195	109	392	694	8030	1704
1997	9328	8987	104	1253	1611	6019	341	79	262	1062	104	367	591	8266	1723
1998	5798	5265	110	992	859	3304	533	262	271	1428	110	406	912	4370	1185

資料：山林庁『林業統計年報』1990，99年より作成．
注：90年以降廃材は合計に含まない．

国内材供給量は，1975年の90万 m^3 が80年101万 m^3，85年119万 m^3 とわずかながら増加が続き，その後も97年までおおむね110万 m^3 前後を維持してきた．しかし，総供給量に占める国内材の比率（自給率）は，80年代まででも10%内外，90年にはさらに低下し，95年以降は4～5%にすぎない．もっとも，98年には外材輸入量が減少したため自給率は7%に上昇している．

一方，輸入材は1975年の638万 m^3 が，80年には1,272万 m^3 とほぼ倍増し，さらに90年2,061万 m^3（80年対比62%），95年2,427万 m^3（同91%増）と著しい増加が続き，96年には2,621万 m^3（同106%）と史上最大を記録した．しかし，97年には2,539万 m^3（前年比△3%減），さらに98年には1,865万 m^3（同△27%減）と大幅に減少した．前年末からのアジア経済危機によってウォンが下落し，外材価格の上昇が激しかったためと考えられる．

外材輸入量を原木と製品とに分けてみると，1975年に原木が80%を占め，製品は20%にすぎなかった．ところが，80年代以降は徐々に製品の割合が高まり，韓国の木材輸入構造は「70年代の原木輸入型」から「80年以降の製品輸入型」に大きく変化するのである．すなわち，75年代の木材輸入量は原木が512万 m^3，製

品が126万 m^3 で，製品率は概ね20%にすぎなかった．ところが，80年には製品が658万 m^3（75年対比5.2倍）に急増し，外材の製品率は52%に上昇した．製品輸入量はその後も着実に増加し，90年1,232万 m^3（80年対比87%増），製品率60%，95年1,604万 m^3，66%，さらに96年には1,818万 m^3 と史上最高を記録し，製品率も70%に達したのである．その後，製品輸入量は97年1,712万 m^3，98年1,428万 m^3 と量的には減少したが，製品率は98年77%とさらに増大しているのである．

3 原木需要の動向

国内木材産業の原木需要量は，1975年の647万 m^3 から80年775万 m^3，ピークの90年には942万 m^3（80年対比22%増）に増加したが，上述の木材需給量のような著しい拡大はみられなかった．それは，前述のような木材供給構造の製品輸入型への移行によるところが大きいと思われる（表2）．

原木需要を用途別にみると，1997年の933万 m^3 の内，製材用を含む一般用材がもっとも多くて67%を占めており，ついで合板用18%，パルプ用13%，その他（抗木等）用2%の順である．

原木需要の中で70年代及び80年代初頭にもっとも大きなシェアを占めていたのは合板用であった．合板用原木需要量が75年には323万 m^3，50%，80年にも336万 m^3，43%を占めていたのである．しかし，国内合板産業は合板輸入の拡大によって急速に競争力を失い，85年には原木需要量220万 m^3（80年対比△5%減）で，シェア30%，90年189万 m^3（同△44%減），20%，95年149万 m^3（同△56%減），16%と，木材産業におけるウェートが急速に低下しているのである．

他方，製材用を含む一般用原木需要量は，75年はまだ251万 m^3，シェア39%にすぎなかったが，80年には333万 m^3，43%と合板用と肩を並べ，85年には382万 m^3（80年対比14%増），52%と過半を占めるに至った．さらに，90年には654万 m^3（同96%増）となりシェアも69%に達した．90年代には630万 m^3 前後で推移したが，経済危機で住宅建築の激減した98年には358万 m^3（90年対比△45%減）まで減少した．

パルプ用材は80年代までは50万 m^3 前後，原木需給量に占めるシェアも8%にすぎなかったが，95年には128万 m^3 に増加し，シェアも14%に拡大し，この水準は97年まで維持された．98年には99万 m^3 に減少したが，シェアは17%に逆に増大した．

Ⅲ 木材産業の動向と木材需給

1 製材業—高い外材依存率，零細な工場規模—

韓国の製材工場数は1965年には1,972工場であったが，建設景気の拡大など高度経済成長期を経て80年には2,025工場，従業員数25,524人とピークに達した．しかし，その後は工場数，従業員数とも概ね減少傾向をたどり96年には936工場，10,364人にまで減少した．1工場当たりの従業員数は80年12.6人，90年12.1人，95年9.0人と減少している（表3）．

製材業の原木消費量は，1975年の319万 m^3 が80年421万 m^3 に増加した．この傾向はその後も続き，91年には617万 m^3 とピークになり，製材生産量も404万 m^3 と史上最大を記録した．しかし，95年には原木消費量は474万 m^3，生産量は344万 m^3 に減少した．1工場当たりの原木消費量は，80年2,080 m^3，90年3,231 m^3，95年3,379 m^3 と拡大しているものの，依然として小規模である．

原木消費量に占める国内材のウェートは，80年はまだ12%を占めていたが，91年は6%，94年も7%と著しく小さい．9割以上を輸入材に依存しているのである．輸入原木消費量は年々増加傾向をたどり91年には580万 m^3，94%に達したが，その後は減少傾向に転

表3 製材産業の工場数及び従業員推移

単位：人，千 m^3

年		1975	1980	1985	1990	1994	1995	1996
総数	工場数	1977	2025	1956	1659	1477	1402	936
	従業員	—	25524	15650	20022	14476	12592	10364
	原木消費量	3189	4211	4152	5360	7086	6549	—
1工場当り	従業員	—	12.6	8.0	12.1	9.8	9.0	—
	原木消費量	—	2.1	2.1	3.2	4.8	4.7	—

資料：山林庁『林業統計年報』1999年より作成．
注：製材産業に関する調査は96年から実施しない．

表4　製材原木消費量及び製材生産量の推移

単位：千 m^3

年	生産能力	製材原木消費量					製材生産量
		合計	国内材	輸入材			
				計	針葉樹	広葉樹	
1975	6392	3189	—	—	—	—	2241
1980	7936	4211	487	3724	—	—	2977
1985	7704	4152	645	3507	2201	1306	2952
1990	7507	5360	604	4756	3466	1290	3897
1991	8089	6170	371	5799	4505	1294	4041
1992	7324	5478	325	5153	4111	1042	3513
1993	6581	4560	292	4268	3528	740	3249
1994	7082	5285	376	4909	4032	877	3862
1995	6549	4737	403	4334	3826	508	3440

資料：1）山林庁『林業統計年報』1999年.
　　2）林業研究院『林業経済動向』1996，99年より作成.
注：製材産業に関する調査は96年から実施しない.

表5　製材製品の輸出入量推移

単位：千 m^3

年	1975	1980	1985	1990	1994	1996	1997	1998
輸　出	183	376	161	198	36	24	20	7
輸　入	—	44	169	691	886	1161	985	480

資料：1）山林庁『林業統計年報』1990年.
　　2）林業研究院『林業経済動向』1996，99年より作成.

じている．なお，90年代になると，それまで熱帯産広葉樹材の輸入が3割程度を占めていたのに対して，温帯産針葉樹材が急速に増加してきた．特に，ラジアタパインは90年代以降原木輸入量が急増している（表4）.

製材品の貿易は，1980年には輸出量が38万 m^3 に達し，90年までは20万 m^3 前後を維持していた．しかし，80年代に細々と始まった製材品輸入は90年代にはいると大幅に増加し，90年の69万 m^3 が96年116万 m^3 に達した（表5）.

2　合板産業―加工貿易から製品輸入へ―

合板産業は，70年代から80年代央まで韓国のもっとも代表的な輸出産業の一つであった．しかし80年代央以降，インドネシアやマレーシア等の東南アジア諸国が森林資源の保護のために丸太の輸出制限と合板産業の振興並びに合板輸出の拡大を始めたため，韓国内産の合板は海外市場での競争力を急速に失い，国内生産量は漸次減少していったのである.

合板工場数は75年の14工場が85年の88工場まで毎年増加していたが，90年代にはいると徐々に減少し始め，97年には7工場になった．従業員数も合板産業の衰退や生産の自動化に伴って73年の20,870名が85年9,929名，90年7,298名，そして97年には2,836名まで大幅に減った（図1）.

合板生産量は1970年の107万 m^3 が75年には181万 m^3 に拡大し，80年にも158万 m^3 を保っていた．しかし，その後は年々減少し96年には90万 m^3 と75年の半分に減少したのである（表6）.

一方，合板の輸出入をみると，1970年代は生産量の実に99％が輸出に向けられていた．75年が72％，80年でも61％に達したが，85年以降は国内需要の拡大を反映して輸出量は10万 m^3 前後にまで急減する．逆に，輸入量は1980年代まではほとんどゼロに等しかったが，1990年に74万 m^3 を記録し，95年には131万 m^3 に拡

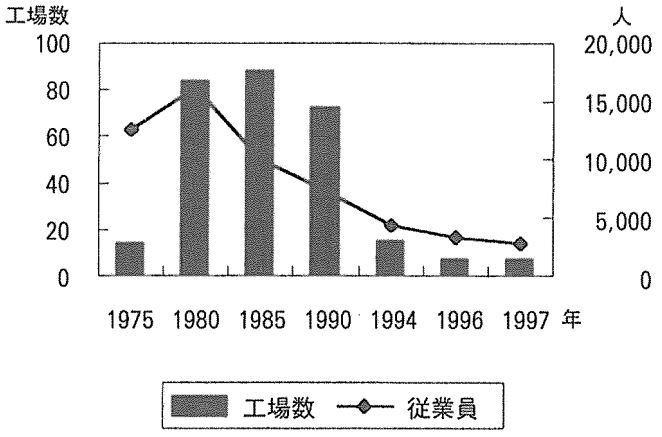

図1　合板産業の工場数及び従業員数推移
資料：林業研究院『林業経済動』1996，99年より作成.

表6　合板の生産及び輸出入量の推移

単位：千 m^3

年	1970	1975	1980	1985	1990	1995	1996	1997	1998
生産量	1069	1809	1575	1227	1124	892	896	1014	641
生産能力	1449	2426	2517	2409	1329	1032	991	1032	1032
輸　入	－	1	23	11	735	1307	1081	970	500
輸　出	1055	1304	953	127	154	101	89	44	146

資料：1）山林庁『林業統計年報』1990，99年.
2）林業研究院『林業経済動』1996，99年より作成.

表7　合板の規格別生産推移

単位：千 m^3

年	合計	厚さ3.5mm以下	3.6-5.9 mm 以下	6.0-11.9 mm 以下	12.0mm 以上
1975	1809	79	1386	65	279
1980	1575	30	823	149	573
1985	1227	170	333	101	623
1990	1124	187	47	34	856
1995	722	13	3	2	704
1996	726	7	4	6	709
1997	866	7	8	13	838
1998	518	8	5	24	482

資料：1）山林庁『林業統計年報』1990，99年.
2）林業研究院『林業経済動』1996，99年より作成.

大している．国内生産量の減少に代位する形で輸入量が急増しているのである．

そこで，この合板の国内生産量を品種別にみると，70年代までは主に家具や建築物の内装材に利用された厚さ6mm未満の製品が80%以上を占めていた．しかし，80年代以降は12mm以上のいわゆるコンクリートパネル用合板の生産が急増し，90年には総生産量の76%，95年には98%を占めるにいたった．こうした品目別の生産量の変化は，東南アジア諸国の6mm未満合板の生産力が高く国内製品が競争力を失い，逆に12mm以上の合板は東南アジア諸国での生産量が少なく，国内製品が競争力を保持していたためであることはいうまでもない（表7）．

3　紙・パルプ産業―高い古紙利用率―

鉱工業調査によると，1995年末現在の紙パルプ工場数は2,671工場，総従業員数は約70千人であり，この内パルプ工場は5工場，637人であった．

1995年のパルプ需給量は7,163千トンであり，このうち国内供給量が58%と過半を占め，輸入量は42%であった．また，ヴァージン・パルプと古紙パルプに分けてみるとヴァージン・パルプは31%しかなく，古紙パルプが69%ときわめて大きな割合を占めている．ヴァージン・パルプは輸入の割合が圧倒的に大きいが，古紙パルプでは国内産古紙のウェートが高い．パルプ需量は，1968年は138千トンにすぎなかったが，80年には1,692千トンとなり，以後，90年4,799千トン，95年7,163千トン，97年8,776千トンと年々大幅な増加が続いている．ヴァージン・パルプについては国内産の伸びはわずかであり，輸入パルプの伸びが著しい．そしてそれ以上に増加しているのが古紙パルプであり，なかでも国内産古紙によるところが大きい（表8）．

パルプ用原木需要量は，パルプ生産量の動向に対応して1988年の68万m^3が95年には124万m^3にほぼ倍増しているが，国産材の微減に対して輸入原木・チップが大幅に増加したため，80年代末に8割強を占めていた原木の国内材率は95年には34%に後退した．パルプの種類別に原木の種類をみると，主に新聞用紙に用いられる機械パルプ原木は概ね250千m^3で推移し，その大半が国産マツである．一方，一般の紙・板紙用に用いられる化学パルプ原木はこの間に2倍強に増加しているが，国内産原木が減少傾向で推移しているのに対して，輸入原木が急増しているのが特徴的である（表9）．

一方，紙の生産量は，1965年は120千トン，75年でも662千トンにすぎなかったが，80年代から著しい増加傾向をたどり，90年4,524千万トン，95年6,877千トン，そして97年には史上最大の8,364千トン（80年対比5倍増）に達した．

紙・板紙類の輸出は90年代にはいると急増し，95年99万トン，96年138万トン，そして97年には208万トン（90年対比7.6倍増）を輸出した．そのなかで板紙類・印刷用紙が輸出量の9割程度を占めてきた（表10）．

表8　パルプ需要量及び紙生産量推移

単位：千トン，%

年	総数			ヴァージンパルプ						古紙			古紙使用率	紙類生産量
	合計	国内生産	輸入	合計	パルプ生産			輸入	自給率	合計	国内	輸入		
					計	化学	機械							
1965	138	72	66	92	33	1	32	59	35.8	46	39	7	33.3	120
1970	368	182	186	239	80	5	75	159	32.0	129	102	27	35.1	330
1975	714	303	411	325	94	7	87	231	28.8	398	209	180	54.5	662
1980	1692	749	943	620	167	30	137	453	27.5	1072	582	490	63.4	1680
1985	2353	1085	1268	835	267	129	138	567	32.1	1518	817	701	64.5	2312
1990	4799	2176	2623	1457	301	142	159	1156	20.7	3342	1875	1467	69.6	4524
1995	7163	4162	3001	2218	500	319	181	1718	22.6	4945	3662	1283	69.0	6877
1996	7917	4503	3414	2526	560	338	222	1966	22.2	5391	3943	1448	68.1	7681
1997	8776	5140	3636	2690	610	413	197	2080	22.7	6086	4530	1556	69.3	8364

資料：1）山林庁『林業統計年報』1983，90，99年．
　　2）林業研究院『林業経済動』1996，99年より作成．

表9　パルプ用材の推移

単位：千 m^3

年	合計	国内材率(%)	機械パルプ			化学パルプ			
			計	国内松	輸入松	合計	国内広葉樹	国内針葉樹	輸入材
1988	687	98.1	252	252	—	453	236	143	56
1989	663	79.9	230	230	—	433	187	113	133
1990	641	79.9	203	203	—	438	204	105	129
1991	682	67.9	256	201	55	426	192	70	164
1992	681	65.3	257	245	12	424	141	59	224
1993	1066	37.7	245	245	—	821	132	25	664
1994	1220	35.3	284	284	—	936	149	—	787
1995	1243	33.7	275	268	7	968	151	—	817

資料：林業研究院『林業経済動』1996，99年より作成．

表10　紙・板紙類の輸出量の推移

単位：千トン

年	合計	新聞用紙	印刷用紙	板紙類	その他
1980	31	—	—	14	17
1985	91	—	—	27	63
1990	274	40	35	70	129
1995	994	12	371	537	74
1996	1384	61	471	791	61
1997	2076	279	666	1063	68

資料：林業研究院『林業経済動向』1996，99年より作成．

4　ボード産業―合板からPB・MDFへ―

ボード類にはパーティクル・ボード（PB）と中密度繊維板（MDF）とがある．

1997年にはパーティクルボード工場4社，5工場，MDF工場5社，10工場がそれぞれ稼働していた．

このボード工業は1960年代に形成されたが，本格的な発展が見られるのは90年代に入ってからである．すなわち，PBの国内生産量は90年の165千 m^3 が95年には548千 m^3，97年には721千 m^3 に増加したし，MDFも113千 m^3 から590千 m^3，728千 m^3 と顕著な増加傾向をたどったのである．これは，合板が80年代をピークに減少に転じたのとは著しく対照的である（表11）．

ところで，PBやMDFの製造原料は製材廃材が大半を占めている．日本では主に木造住宅の解体廃材が利用されているが，韓国では木造住宅がほとんどないためその割合はきわめて小さい．近年は廃材の収集・運搬が困難になり，国産マツ丸太や輸入原木の利用が増える傾向が見られる．従って，廃材の割合も92年の95%であったが，95年には79%に減少した（表12）．

ボード類の輸入量（PB+MDF）は，85年には84千 m^3 であったが，90年には553千 m^3 に急増し，95年にはさらに拡大して561千 m^3 となった．特に，PB輸入量が大きく，95年にはボード類の輸入量の86%をPBが占めていた．しかし，ボード類の輸入量は95年をピークに減少傾向に転じ，国内自給率は95年の33%が95年には68%に上昇し，さらに97年には74%にまで上昇した．

なお，97年の「木材需要及び供給実態調査」の結果によると，PBの主な用途別の利用比率は台所家具用55%，事務家具用25%，電子製品ケース10%などであり，MDFは一般家具用60%，楽器用15%，事務家具用10%，電子製品ケース10%などである．

表11　ボード類の生産及び供給量推移

単位：千 m^3

年	総数		PB				MDF			
	生産量	輸入量	合計	生産量	輸入量	国内供給量	合計	生産量	輸入量	国内供給量
1975	39	−	39	39	−	18	−	−	−	−
1980	68	−	68	68	−	48	−	−	−	−
1985	55	84	112	55	57	54	27	−	27	−
1990	278	553	566	165	401	165	265	113	152	113
1995	1138	561	1033	548	485	547	666	590	76	543
1996	1379	461	1067	659	408	641	773	720	53	631
1997	1449	341	1014	721	293	748	776	728	48	689
1998	1078	201	680	507	173	506	599	571	28	507

資料：山林庁『林業統計年報』1983，90，99年より作成.
注：P.B：パーティクルボード，MDF：繊維版（中密度）.

表12　PBとMDFの原料調達

単位：千 m^3

年	合計	マツ原木	輸入針葉樹原木	廃材
1992	1070	33	22	1015
1993	1260	95	131	1034
1994	1495	56	259	1180
1995	2071	198	223	1650

資料：林業研究院『林業経済動』1996，98年より作成.

表13　主要経済指標（1965～1999年）

年	人口（百万人）	GDP 成長率（%）	GNP（10億US$）	一人当りGNP(US$)	失業率（%）
1965	28.9	5.7	3.0	104	7.3
1970	32.2	8.8	8.0	253	4.4
1975	35.3	7.1	20.9	592	4.1
1980	38.1	−2.2	60.9	1598	5.2
1985	40.8	6.3	90.9	2229	4.0
1990	42.9	9.5	252.3	5886	2.4
1995	45.1	8.9	488.1	10823	2.0
1996	45.5	6.8	518.3	11380	2.0
1997	46.0	5.0	474.0	10307	2.6
1998	46.4	−6.7	313.0	6742	6.8
1999	46.9	10.7	401.1	8581	6.3

資料：韓国統計庁．Oneline.http://www.nso.go.kr/2000年

Ⅳ 考　　察

韓国の経済は1960年代以降，1998年のアジア経済危機によって危機的状況に陥るまでは，概ね高い成長率を維持してきた．その結果，韓国人の１人当たりGNPは，1980年1,598ドル，90年5,886ドル，95年10,823ドル，そして97年には11,380ドルに達したし，失業率も大幅に改善され，80年の5.2％が95年以降は２％台にまで低下したのである（表13）．

こうした著しい経済発展に伴って，韓国の木材需給と木材産業は著しい変容を遂げた．

木材需給では，経済発展が荒廃した森林資源という条件の中で始まったため，木材供給は自給率数％ともぱっら外材に依存してきた．当初は，輸出産業としての合板工業が木材産業を牽引し，熱帯産合板原木の輸入と合板製品の米国輸出を軸に展開した．しかし，韓国の経済発展に伴う国内市場の拡大と，原木輸出国における森林資源管理の強化や合板産業の振興，とによって合板輸出量が急減し，代わって熱帯諸国産の合板輸入が増加した．製材業でも一貫して外材依存率が著しく高いが，やはり熱帯産広葉樹材から温帯産針葉樹材への移行が進み，並行して製材品輸入が増加しつつある．

一方，合板産業は製品輸入への転換の中で輸入関税が引き下げられた．国際的な貿易自由化の動きによるが，韓国における産業構造の重化学工業化の現れであることはいうまでもない．この結果，合板産業の国際競争力は著しく低下したが，厚さ６mm以上の合板の関税が高めに維持されたため，コンクリートパネル用合板等の生産は維持され，現在も高い自給率を保っている．

一方，韓国内で合板との競争関係の強まっているのがパーティクルボードやMDFである．廃材木屑やチップを接着剤で固めて製造されるボード類は，近年，着実に国内生産量が拡大している．家具や中高層住宅の内装用材料として需要が増加しつつあり，これらの分野では合板を凌ぐ勢いにある．それは，所得増加に伴って住宅の内装や家具類の高級化への要請の強まり，こうした要請にボード類が価格，規格，品質等の面でより有効に対応できているためであろう．

このように，韓国の木材産業は韓国経済の発展・国際化の中で大きな変貌を遂げつつある．国内木材産業の競争力の相対的な低下の中で木材製品の輸入のウェートが著しく高まっているのである．しかし，同時に，荒廃の著しかった国内森林資源も徐々に充実しており，国内資源の利・活用が新たな課題として登場しつつある．国内資源に立脚した木材産業の分析と今後のあるべき姿の検討が望まれているのである．

文　　献

韓国農村経済研究院　1992　韓国林業の経済分析．研究報告264（韓国語）

韓国農村経済研究院　1992　用途別の木材需要予測を通じた長期造林政策の方向研究．研究報告，**265**：34-61頁（韓国語）

山林庁　1994　山林100年の計画樹立のための基礎研究．（韓国語）

山林庁　1990　林業統計年報．第20号（韓国語）

山林庁　1999　林業統計年報．第29号（韓国語）

朱麟原・李聖淵　1998　韓国の原木，製材木，合板市場の趨勢予測．山林科学論文集，**58**：93-103頁（韓国語）

朴勇倍　1995　韓国の木材消費実態．林業情報，**56**：19-23頁（韓国語）

林業研究院　1991　韓国の林産業．研究資料第59号（韓国語）

林業研究院　1996　林業経済動向．研究資料第120号（韓国語）

林業研究院　1999　林業経済動向．研究資料第148号（韓国語）

Summary

More than 90% of timber supply in Republic of Korea depends on logs imported from overseas. Most of them were the tropical timbers which had been used as materials of plywood industry until 1970. Since 1980, wood industry in Korea had been in difficulties for steady supply of the materials because of the strong export prohibition of the export countries, which was resulted from the policies for protecting both the wood product industry inside the countries and environment, hence resulted the reduction of felling amount and the log export prohibition regulation. Therefore, the decrease in export of the wood processing products in Korea resulted serious stagnation for the export of Korea's wood industry.

The competition of Korea's products in oversea market also dropped rapidly off as a result of a large amount of export of the wooden products from some countries of Southeastern Asia, such as Indonesia and Malaysia. Moreover, the structure of timber import of Korea converted from the type of log import in 1970 into that of wood products import, with increasing the import of the products like plywood and lumber.

Consequently, the increase of import of wood products brought the decline of plywood and lumber industries and their productions. In contrast, increasing demand for paper, pulp, particleboard and fiberboard has resulted the expansion of their industries and imports. In future, it is expected the increase of supply for PB and MDF which are known as a substitutive material for particleboard and fiberboard.